

1 歳児と保育者のふれあい遊びにおける 共感的相互作用の事例研究

遠 藤 晶
(武庫川女子大学文学部教育学科)

Case Studies of Sympathetic Interaction in Playing with Physical Contact (Fureai Asobi) : One-year-olds and Childcare Workers

Aki Endo

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

This study aimed to clarify sympathetic interaction in playing with physical contact (fureai asobi) between one-year-olds and childcare workers. Specific cases were used to investigate which types of games with one-year-olds stimulated empathetic interaction. The childcare workers communicated their enjoyment of the play to many children, helped them to actively participate, and, to aid active participation, immediately read the children's moods, enjoyed the games, and were actively engaged. We conclude that this interaction led to sympathetic interaction.

問題の所在と目的

1 ふれあい遊び

ふれあい遊びは、わらべうたや幼児が好きな歌に合わせて、大人と幼児、あるいは幼児同士で、動きを楽しむ遊びである。藤田(2001)¹⁾は、「いないいないばあ」「たかい、たかい」「だるまさんだるまさん」「あがりめ、さがりめ」などの遊びを「ふれあいあそび」と呼び、ふれあう人同士が楽しいひと時をすごせる遊びとしている。塩野(2001)²⁾は「ふれあい歌遊び」と呼び、保護者が幼児とのスキンシップを図れるように、また保育者が保育の導入に活かせるように、関わり方を具体的に示している。

ふれあい遊びは、歌いながら互いにまねをしあったり、身体に直接ふれたりして遊ぶものが多く、相手や仲間との一体感や安心感を伝えることができる。室内で遊べるものもあれば、屋外で遊べるものもあり、身体を動かす楽しさや爽快感を味わうことができるため、親子遊びや低年齢からの保育に長く好まれてきている。

阿部(2002)³⁾は、ふれあい遊びをする際に大切にすることを次のように述べている。

赤ちゃんの目をまっすぐ見て、応えてやるのが大事である。赤ちゃんが声を出して呼んでみたら、それに応えてもらったことを喜ぶ。目もまだはっきり見えない赤ちゃんが、何に頼るかという、自分にむけられる優しい声である。それを求めて赤ちゃんが声を出す。何もかえってこなかったら、赤ちゃんは不安になるが、人を求めたらちゃんと応えてもらったという体験をすると、赤ちゃんは声をかけられたら相手の目を見ることができるようになる。しっかりと体にさわってもらうことで、

幼児は体を通して、人を信じる気持ちが育っていくことにつながる、と述べているように、ふれあい遊びは、幼児の情緒面や運動面の発達に影響を及ぼし、関わる大人との信頼関係の基礎を作るといえる。

2 1～2歳児にとってのふれあい遊び

1) 1～2歳児の発達特性

保育所保育指針⁴⁾には、おおむね1歳3か月から2歳未満の子どもの発達の特徴として、「歩き始め、手を使い、言葉話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる。また、大人の言うことが分かるようになり、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる」と示されている。2歳児ごろについては、「歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達し、発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。盛んに模倣し、物事の間共通性を見いだすことができるようになる」とともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる」と示されている。

幼児期の音楽的発達について Moog (1968)⁵⁾は、

1歳児の音楽に対する動きは、両足を揺り動かす動きや、頭を縦に振る動き、踵を上下させたり、膝を折ったり伸ばしたり、片手の平を規則正しく開いたり閉じたりする動きが見られる。1歳の中ごろには、「指揮をする」ような動き、上下に飛び跳ねる動きや、左右に揺れ動く動きも変化する。子どもが歩けるようになるまえに、音楽に対して子どもを抱き上げて子どもと一緒に踊ってやれば子どもは非常に好むようになる。2歳児においては、音楽に集中して動かずに傾聴するようになる半面、音楽に対する運動反応は非常に多くなり、何か物をリズム的に動かすことも多くなる。歌の模唱については、1歳半ごろはせいぜい1小節ほどであるが、2歳児ごろになるとより長くなる、としている。特に1歳児は、子どもは自分で動いたり、相手の動きに何とかして合わせたりする意図はなく、むしろ揺り動かされたい欲求と、相手と身体接触をしたいという欲求が混在している時期である、と述べているが、1歳児の音楽に対する動きの特徴として重要な指摘であろう。

1歳児は、無目的とも思える動きも多いが、リズムカルな運動や音楽に合わせて身体を動かすことを好むようになり、喜びや感動や発見を共感してくれる人や友達と一緒に身体を動かすことを楽しむことができる。ふれあい遊びは、幼児が大人の歌声を聴き、表情を間近で見て、手足や身体全体にリズムの刺激を送り込んでもらえる遊びである。

2) 関わる人との相互交流

大人と幼児のふれあい遊びでは動作やリズムを合わせて遊ぶ。動きやリズムを合わせるには、お互いの相互作用が必要となる。Condon & Sander (1974)⁶⁾は赤ちゃんの身振りが母親の発話に同期することを示したが、Konvalinka et al. (2011)⁷⁾は、こうした同期はだれとでもすぐに起こるわけではなく親しい間柄の人とのみで同期すると述べている。Cirelli ら (2014)⁸⁾は、14カ月の赤ちゃんを対象とした研究で、抱っこされて向かい合った相手と音楽に合わせて一緒に跳ねているだけでも、その相手が困ったときに自発的に助けるような援助行動を見せるとして、幼い幼児にとって相互に同期することは援助行動を促進する機能があるとしている。大人が幼児にふれあい遊びを通して関わり、幼児には喜ぶ表情が現れ、その喜ぶ表情を見た大人は、さらに楽しさを伝えようと遊びを変化させ相互交流が深まる。徳永 (2016)⁹⁾は、身体各部位の運動リズムの同期に支えられた相互の関わりに心をつなぐ機能があると述べている。

幼児は、ふれあい遊びの動きや歌によって視覚・聴覚を刺激され、身体にふれあう優しい感覚を味わい、動きの面白さ、リズムに合わせて身体で表現する楽しさを知る。こうした身体表現の基礎的体験となる遊びを通して関わる人との豊かな交流が広がられていく。

3 共感的相互作用

ふれあい遊びによって、人との関わり心地よい緊張感や相互の感情交流が生まれるが、筆者は、快の感情に裏付けられた他者との相互作用を「共感的相互作用」と定義し、ふれあい遊びのひとつである手遊びによって「共感的相互作用」の効果があるか調査を試みた(遠藤 2016)¹⁰⁾。

大学生4名を対象に、「あんたがたどこさ」の手遊びを一人で行う時と3人で向かい合って行う時の、額と鼻頭の皮膚表面温度をサーモグラフィによって測定し、遊びの状況による温度変化を比較した。筆者の研究では3人で行った方が、額の温度は変化なく、鼻頭の温度は低下するという結果を得た。3人で向かい合って一緒に手遊び「あんたがたどこさ」をしている時は、歌い、息弾ませ、時には笑い、楽しんでいる様子が見られ、呼吸量が増加したための鼻頭温度低下と考えた。

中澤(2009)¹¹⁾は、大学生・大学院生を対象に、情動喚起刺激視聴時の心拍反応と顔面の体表面温度をサーモグラフで測定し、ネガティブ情動喚起時に鼻頭の体表面温度が上昇したことを示している。Mizukamiら(1990)¹²⁾も、母子分離場面における乳児の情動変化を測定し、母親と分離された乳児の額の皮膚温度が低下したことを示して、不安時の交感神経系の活動が亢進したことに伴い、皮膚血管が収縮したことによるものとしている。

先行の研究結果はネガティブ情動喚起時や母子分離場面の不安な状況についての結果である。筆者の調査結果から、楽しい環境では、額の温度は変化なく、鼻頭の温度は低下すると考えた。調査対象者へのインタビューで、3人ですると「ホッとする」「安心する」「だんだん盛り上がる」「むちゃくちゃになった(リズムがくずれた)けれど、なんとかいけた」「楽しかった」というような発言があり、3人で行う手遊びはリラックスした状態で行われ、遊びに対する意欲が亢進した状態であったと考えた。仲間同士でする手遊びでは、遊びの参加者が楽しくなるような共感的相互作用が高まり、手遊びの楽しさに繋がったといえる。

遊びに参加する人の関わり方で遊びの質が変わり、ふれあい遊びも、大人の関わりが幼児の表情や動きに影響を及ぼすと考える。

4 本研究の目的

1歳児ごろの幼児にとってふれあい遊びは、大人が伝える遊びへの関心を高め、感覚刺激に対する適応とリズムに合わせた動きの楽しさを獲得すると同時に、人との関わりへの関心を深める機会になる。特に保育の状況では複数の幼児を対象に保育者が関わる場面も想定されるため、保育者、幼児同士などの複雑な相互作用が高まる状況となる。

本研究の目的は、保育者と幼児のふれあい遊びにおける「共感的相互作用」を明らかにするために、1歳児とのふれあい遊びを保育者がどのような関わりをすると「共感的相互作用」が促されるかについて、具体的事例を通して検討することである。

事例検討

1 実践観察

1) 日時と場所

2015年11月に、〇市認定こども園のプレイルームで遊びの様子を観察を行った。保育観察の実施にあたっては、園長およびクラス担任に保育観察の趣旨を説明し、ビデオ撮影で得られたデータなどは個人情報管理の厳重な管理と適切な処理を行い、研究以外の目的には使用しないという説明をして了承を得た。

2) ふれあい遊びの流れ

保育者は近くにいる1歳児の様子を見て、話かけ、好きな遊びを手伝っていたが、保育者が声をかけふれあい遊びを始めた。日常の保育のなかにもふれあい遊びなどを取り入れ、プレイルームで複数の保育者が関わり、ゆったりとした保育は行われているようであった。

3) 保育者が1歳児と遊んだふれあい遊び

(1) 「きゅうりができた」

- 1 きゅうりができた きゅうりができた
きゅうりができた さあ たべよう
- 2 しおふってパッパッパ しおふってパッパッパ
しおふってパッパッパ パッパッパ
「もみ もみ もみ もみ もみ もみ」
- 3 お水をジャージャー お水をジャージャー
お水をジャージャー ジャージャージャー
- 4 包丁でトントントン 包丁でトントントン
包丁でトントントン トントントントン

(2) 「いっぽんばし こちょこちょ」(わらべうた)

- いっぽんばし こちょこちょ
たたいて つねって なでて
かいだん のぼって またおりて
うらから まわって
こちょ こちょ こちょ

(3) 「バスにのって」(谷口國博 作詞・作曲)

- 1 バスにのってゆられてく(ゴーゴー)
バスにのってゆられてく(ゴーゴー)
そろそろ右に曲がります(ワン, ツー, スリー)
- 2 バスにのってゆられてく(ゴーゴー)
バスにのってゆられてく(ゴーゴー)
そろそろ左に曲がります(ワン, ツー, スリー)

【保育者の動き・遊び方】

<手をたたく>

<塩をまく格好をする>

<幼児の身体をくすぐる>

<幼児の身体をなでる>

<手の平側面で幼児の身体にふれて
切る格好をする>

<幼児の顔から足先まで指でなぞる>

<身体を軽くさわる・なでる>

<身体に沿わせてなで上げる・下げる>

<抑揚をつけて歌い, 期待を持たせな
がら身体にたくさんふれる>

<膝上に乗せて上下にゆする>

<右側に倒す>

<膝上に乗せて上下にゆする>

<左側に倒す>



図1 ふれあい遊びがはじまる直前の様子



図2 「きゅうりができた」の遊び



図3 「いっぽんばし こちょこちょ」の遊び



図4 「バスにのって」の遊び

4) 観察の記録と分析

観察は筆者を含む3名で行い, ビデオ2台を設置し, 遊びを記録した. 分析は, ビデオを再生し, 上

記の遊び(1)～(3)の遊びごとに、保育者と子どもの関わり、子ども同士の関わりについてのエピソードを記録した。エピソードの記録と分析は筆者が行った。分析の対象は、ビデオ再生によって記録が可能であった8名(以下A児などと記載する)である。保育者のふれあい遊びの中での快の感情を基盤とした共感的相互作用の事例を挙げて以下検討を加える。

2 保育者との遊びの流れと共感的相互作用

保育者がC児を寝かせたことから遊びが始まった。保育者がテンポや声の大きさなどを変化させて歌うのを聞いて、幼児は喜ぶ表情を見せる。幼児の表情や動きの変化を見て、保育者は遊び方を変化させる。保育者は幼児同士の座り方や寝かせ方などに配慮し、身体と身体の距離間を調整した。幼児にやりたい気持ちを確かめるように言葉をかけ、働きかけ、心地よい感覚になるように遊び方を工夫していた。幼児のつぶやきや動き・行動などを受けとめ、時にはあいづちを入れ温かい表情で遊びを展開した。

1) 「きゅうりができた」

「きゅうりができた」は、リズムカルな歌である。保育者は軽快に歌い、目の前にいる1歳児に一度にたくさん関わられるように手を素早く動かしていた(図2)。

エピソード①

保育者に近寄ったC児に「ごろんして」と声をかけ寝かせた。近くにいたA児がC児と保育者の近くに寝転ぶと、二人の間にB児が「Bちゃんも」と入ってきた。近くで座っていたD児にも声をかけて寝かせ、そばにいたF児とE児も加えて、保育者は手をたたいて歌い出した。「もみもみもみ」と身体をゆっくり優しくさわりくすぐりを加えたところで、A児は「キャー」と声を上げ、仰向け姿勢からうつ伏せ姿勢に変えている。さらに身体を回転させて保育者に向かって声を上げて喜んでいる。

保育者が歌うのを見て、B児も手をたたいて保育者の動きをまねしている。保育者にくすぐられて、「キャキャ」と笑って保育者を見た。

●保育者との視線の交流・保育者に向ける意識

保育者は穏やかに微笑みかけ、視線を交わした。幼児は保育者に対する力みもなく、自然に視線は保育者の方を向き、これから始まろうとする遊びに、惹きつけられているように思われた。そして、幼児は保育者の関わりを身近に感じている。保育者は歌のリズムに合わせて動くので、幼児の身体に直接そのリズムが伝わっている。保育者に足を付けて前に8人並んで寝転び、安心して身を委ねている感じである。

●大事にされる感触を楽しむ

A児が身体の動きから、保育者に遊んでもらいたい、関わってもらいたい気持ちが表れ、自分に大事に関わってもらっている感触を楽しんでいる。仰向けからうつ伏せ、横向きからさらにうつ伏せと姿勢を変えているが、保育者にくすぐられることを嫌がっている様子はない。徐々に身体が開放され、「キャー」と喜ぶ声や表情で保育者に嬉しさを伝えているようでもある。B児も保育者を見ていて、歌が始まるとリズムに合わせて手をたたいた。保育者からの働きかけに興味を持ち、歌を聞いている。保育者のふれあい遊びを喜んで受け入れ、身体感覚を楽しむ様子が見られる。くすぐられることも予想し、一瞬身を硬直させるが、関わってもらいたい気持ちが表れているように見えた。

2) 「いっぽんばし こちょこちょ」(わらべうた)

「いっぽんばし こちょこちょ」の遊びは、ゆっくりしたテンポで歌い、保育者の左右の手で二人を同時に関わられるようにしていた(図3)。

エピソード②

A 児と G 児が並んで保育者の前に仰向けに寝ている。保育者は二人の幼児の身体を中心を指でなぞり、「いっぽんばしー」と歌った。保育者が「こちょこちょー」と溜めて長めに歌うと、A 児は「キヤー」と声を上げて横向きになり、G 児の方を向いた。A 児は身体の向きを戻さず横向きになったままである。保育者は、G 児にはおなかに、A 児には脇腹をそっとさわって、遊び続けた。「うらからまわって」とさらにじらすように歌い、保育者の身体を幼児に寄せてから「こちょこちょこちょ」と長めにくすぐった。

●保育者への接近

保育者が二人ずつ関わったので、幼児にとっては、自身に対応してもらえる時間が増えたが、自分の番になるまで待つ必要がでてきた。保育者に関わってもらう時は、幼児同士のお互いの距離は近くなって窮屈な状況であるが、保育者への積極的なアプローチが見られた。

●保育者の関わりに合わせた緊張と弛緩

「いっぽんばし こちょこちょ」の歌い方は、幼児の身体に沿わせた保育者の手の動きに協応している。くすぐりの感覚を伝えようと溜めて歌うと、幼児に緊張と期待が伝わり、その期待に応じてくすぐり度合いを高めた手の動きが伝えられる。くすぐりの度合いを調整しながら、歌い方を変化させ保育者の息遣いによって、身体が固まったり緩んだりする感覚を楽しんでいた。

A 児を見ると、くすぐられる感触は苦手のようなのであるが、それでも身体は保育者の方に向けられていて嫌がっている様子ではない。溜めて歌う保育者の遊びを受け止め、してほしいようなしてほしくないような、複雑な感覚を楽しんでいる。また、A 児のように、さわられる身体の場所を自分で選んでいる。おなかではなくこれまでとは違う脇をくすぐってほしいと、身をかかわす様子にあらわれている。自分の身体を感じる機会となるとともに、遊びの変化・展開を期待している様子であった。

●1 歳児同士の譲り合い

幼児が互いの場所を巡り、自己主張も出てくると、幼児の動きにも変化が見られた。他の幼児が足を保育者に向けているが、G 児は頭を保育者に接近させていた。保育者は G 児の身体の向きを調整するために、頭と足の方向転換をさせようと抱きかかえた時、隣にいた B 児は G 児が横に入れるよう身体を寄せて入れる場所を譲る様子が見られた。G 児が何としても入りたい気持ちを B 児が汲み取って、場所を譲った様子であった。

3) 「バスにのって」

保育者の膝に乗せた幼児を膝上で上下にゆする遊びから、「バスにのって」の遊びが始まった。歌に合わせて「ゴーゴー」と手を振ること、左右の傾きを楽しむことを既に経験をしていたようで、保育者がゆっくり歌い始めると、幼児がリズムに合わせていた(図 4)。

エピソード③

保育者は、膝上に E 児を乗せ、さらに A 児、B 児の 3 人を膝上に乗せた。膝を上下させ振動を加えて歌い始めた。保育者は「そろそろ右にまがります」「3・2・1」の掛け声の後、3 人を抱え右方向へ傾けた。3 人は嬉しそうな表情をしている。続いて、「バスに乗って揺られてく」と 2 番の歌詞を歌い、次に左方向に傾けると、再び幼児の嬉しそうな表情が見られた。保育者が歌い終わり、「とうちゃく(到着)」と知らせると、3 人は自分から保育者の膝上から降りた。

膝の上に乗っていなかった C 児は保育者が A 児・B 児・E 児 3 人を膝上に載せてもらっている遊びをじっと見つめていた。保育者が「バスにゆられてく、ゴーゴー」に合わせて、手の動きを付けている。「3・2・1」の掛け声のあと保育者が 3 人を抱えて傾けたことを見て、C 児も一緒に動きをまねて身体を傾けた。やりたい気持ちを表情に表し、遊びの終わりを待って「C ちゃんも」と保育者に言葉で伝えていた。

●要求を伝える

保育者が一人の幼児を膝に乗せたことをきっかけに遊びがはじまった。保育者は A 児・B 児・E 児 3 人を膝上に載せて、膝を上下に動かし、「バスにのってゆられてく」とゆっくり歌い始めた。幼児の身体がリズムに乗ってくると、保育者もさらに膝を上下する動きの速さを変え身体を左右に倒す動きを加えた。C 児は保育者に乗せてもらっている楽しそうな遊びを間近で見ている。自分もやりたい、乗せてほしいと、やりたい気持ちが掻き立てられる。保育者に察してもらいたくて、視線を保育者に向け、遊び

が一段落するまで待ち、自分もやりたいと言葉で伝えた。

●まねる

C児は、A児・B児・E児3人と保育者との遊びを見ていた。3人が保育者に遊んでもらっている遊びに引き込まれるように見ている。保育者が3人を右に傾けると、C児もあたかも自分がしてもらっているように身体を右に傾けた。齋藤(2000)¹³⁾は「まねる力」は「間身体的想像力」という身体と身体の「あいだ」で交される想像力が働くことであって、相手の身体を自分の身体のように感じとる力である」と言う。他者の動き全体を自分の身体に重ね合わせる力で、幼い時期から身に付けている身体の動きを学ぶ方法である。C児は、3人の動きがあたかも自分の身体の動きのように身体を傾け、人の動きを夢中でなぞっているうちに、自分の身体が無意識のうちに動き出したようであった。

1歳児と保育者のふれあい遊びにおける共感的相互作用について、1歳児の身体表現、保育者との関わり、1歳児同士の関わりの3つの観点からまとめた(表1)。1歳児は保育者が与える接触感覚や遊び心を伴う緊張や弛緩を受け止めて、保育者の動きを模倣しようすると同時に、保育者に対する視線交流や、接近・要求など、積極的に関わろうとする意欲も生まれた。1歳児同士は偶然ではあるが譲り合いも見られ、1歳児はふれあい遊びの関わり楽しさを共有しながら、保育者や子ども同士の多様な関わりを広げることが見られた。

表1 1歳児と保育者のふれあい遊びにおける共感的相互作用

1歳児の身体表現	保育者との関わり	1歳児同士の関わり
大事にされる感触を楽しむ 保育者の関わりに合わせた緊張と弛緩 まねる	保育者との視線の交流・保育者に向ける意識 保育者への接近 要求を伝える	1歳児同士の譲り合い

ふれあい遊びにおける共感的相互作用

1 ふれあい遊びにおける共感的相互作用の効果

保育者は動きを見せる、身体にふれる、身体をなでる、指でなぞる、くすぐる、膝上に乗せて揺らすなどの動きで、1歳児が身体感覚を楽しめるよう優しく働きかけた。保育者が柔らかい表情で接し身体感覚への刺激を与えると、幼児は保育者にしてもらおう遊びへの関心もち、歌う声に耳を傾け、姿勢・視線の交流や保育者に向ける意識を高めた。保育者との遊びを通して、ふれてもらいたい、揺らしてほしい欲求を高め、大事にされる感触を期待して保育者への接近が見られ、保育者のリズムに合わせ、模倣欲求・表現欲求も高められていた。くすぐられることを喜ぶ身体の開放とともに、予期せぬ関わりを楽しみつつ保育者を見ている。保育者がくすぐろうとする動きに、身をかわずなど、緊張と弛緩を味わいつつ、保育者の関わり方に興味もち、自分もしてほしいと要求を伝えた。場所を巡るやり取り、場所の譲り合い、要求を伝えるなどの、社会的行動も見られた。

ふれあい遊びの共感的相互作用によって、保育者にしてもらおう遊びに対して、1歳児がそれぞれに関心を高め、自身の身体感覚を楽しみ、感情の交流を深めていた。

2 1歳児と保育者のふれあい遊び

保育者が歌う歌のリズム、動きのリズムに合わせたふれあい遊びに、1歳児が複数で参加した。保育者は、幼児の様子を見ながら、テンポを変え、ささやくような歌い方をしたり、溜めてじらしたり、長めにゆっくり歌ったりして、遊び方の工夫をして関わった。

保育者の関わりに対して幼児は、歌がはじまると歌を聞き、リズムに合わせて手をたたき、身体を保育者に向け、遊びに対する積極的な意欲が見られた。幼児はただ身体を任せてさわってもらおうのを待つのではない。積極的に自身に起きる身体感覚を楽しみ、幼児同士の感情交流や保育者とのコミュニケーション

ンをとっていた。

くすぐりの遊びに対しても、保育者に接近している様子からも嫌がっている様子はなく、してほしいようなしてほしいような複雑な感覚も楽しんでいて、ふれてもらう身体の場所を自分で選び、自身の身体の感覚を楽しんでいたのは、ふれあい遊びを通して保育者からの温かい感触を感じることができたからであろう。複数の幼児が相互に関わる複雑な遊びは、自分の番が来るまで「待つ」ことが必要であった。そのことで一層やりたい気持ちが湧いてくる。やりたい気持ちは保育者への視線や動きで伝えていた。一方、積極的な参加の姿勢は長くは続かず途切れやすいということも特徴であった。心の準備が十分でない幼児は積極的な保育者への接近はなく、「見ている」「その場を離れる」などの様子が見られ、気持ちに照らし合わせた参加をしていた。

1歳児を対象とするふれあい遊びは、保育者との信頼関係が基盤になり、自分もしてほしい、参加したいという意欲につながるであろう。1歳児を対象とする集団の遊びでは、保育者は個々の幼児の遊びに対する意欲を受け止め、瞬時に変化する欲求に対応しつつ遊びを展開する必要がある。

3 共感的相互作用を高める保育者の役割

1歳児を対象にしたふれあい遊びでは、保育者が遊びに直接関わり、幼児同士の関係を調整し、援助を行っていた。保育者の共感的相互作用を高める役割は、①快の感情を共有すること、②幼児の様子に応じて遊びを臨機応変に展開すること、③他児との関係調整の3点であったと考える。

まず、快の感情を共有するために、保育者と複数の1歳児がふれあう遊びでは、幼児の喜ぶ表情が展開の重要な手立てとなっていた。保育者は穏やかな表情で笑いかけている。声のトーンも明るく、時には楽しさを増すように大げさな表現を加えて楽しませユーモアのある関わりが見られた。幼児のやりたい視線や表情を受け止め誘いかけるなど、保育者からの快感情の発信は重要であった。共感や励ましなどを言葉で伝えること、身体にふれる行為を通じた支持的援助や優しく丁寧な対応など、関わり方の質を高めようとしたことが挙げられる。

次に、幼児の様子に応じて遊びを臨機応変に展開することである。幼児と遊んだふれあい遊びは、保育者に近寄ったC児に「ごろんして」と声をかけ寝かせた保育者の誘いかけから始まった。「きゅうりができた」の途中、歌は歌わずくすぐる遊び>だけをしていたように、ふれあい遊びの歌詞に関連して遊びを少し広げることも遊びの幅を広げる。保育者が日ごろから遊びに関する豊富な知識を持っていることも、遊びの展開には欠かせないことである。

3つ目に、他児との関係調整である。1歳児同士の交流を繋げ、楽しさを共有できるよう関係を調整する役割である。保育者の近くを巡ってやりとりが生じた際にも保育者は声を掛けて調整を図っていた。そのため大きなトラブルには発展せず、幼児同士心地よく遊びを継続することができたが、遊びの流れの中で保育者のタイミングのよい言葉かけは重要であった。保育者はできるだけ多くの幼児にふれあえる「関わりの工夫」が必要であった。保育者は、一人一人に十分に関われない場合には、幼児への言葉かけや表情を交わし、後で優先的に関わるなどの工夫をした。

保育者が遊びの楽しさを伝え、関わりの工夫をして幼児同士の交流を繋げることで、相互に関わる快感情を基盤としたふれあい遊びが可能になる。保育者は、幼児の状況を瞬時に読み取り、幼児との遊びを楽しんで創造的に遊びを伝えること、幼児の身体に心地よいリズムや動きの刺激を手足や身体全体に送り込むこと、幼児同士の交流をより密接にすることが求められる。保育者の対応力は極めて重要である。

まとめと今後の課題

本研究では、1歳児と保育者との共感的相互作用について、ふれあい遊びの観察事例をもとに検討した。

1歳児は、リズムカルな運動や音楽に合わせて身体を動かすことを好み、喜びや感動、発見を共感し

てくれる人や友達と一緒に身体を動かすことを楽しめるようになるといわれる。ふれあい遊びを通して、保育者が幼児の様子を見ながら快の感情になるような関わりによって、次のような1歳児の様子が見られた。

保育者にしてもらおう遊びへの関心をもち、ふれてもらいたい、揺らしてほしい欲求を高め、大事にされる感触を期待して保育者へ接近した。保育者のリズムに合わせ、模倣欲求・表現欲求も高められている。身体への刺激を楽しみ、自身の身体の高めた。自分もしてほしいと要求を伝え、お互いに目を合わせて微笑み合うことや、場所を譲ることなどが見られ、遊びの楽しさを共有しようとする共感的相互作用の芽生えが見られた。

その際、保育者は、①快の感情を共有する、②幼児の様子に応じて遊びを臨機応変に展開する、③他児との関係を調整することについて配慮し、複数の1歳児を対象にも遊びのおもしろさを伝え、積極的な参加に繋がるような援助をした。1歳児との遊びを創造的に楽しもうとした保育者の援助によって、共感的な相互作用が高められたのであろう。

1歳児は、まだ自分の身体を自由に使うことも、言葉の理解もまだ十分ではない。しかし、日常的に抱っこやあやしてもらおうを通して、心地よさや身体を通した大人とのコミュニケーションの欲求は十分に持ち得ている。そのため保育者にふれてもらうことやくすぐりなどの身体接触を含む遊びは1歳児には受け入れられやすい。ふれあい遊びは、保育者から発信された歌やリズムが、声の強弱や面白い動きになって幼児の感覚を刺激するが、リズムカルな運動や音楽に合わせて身体を動かす遊びを好む1歳児には楽しい経験になる。身体がまだ小さい1歳児は、間近でかかわる大人の歌声を聴き、表情を見て、手足や身体全体にリズムの刺激を受け止めるので、大人との距離が近く相互関係の機会が増える。ふれあい遊びは、動きの面白さ、リズムに合わせて身体で表現する楽しさを知る身体表現の基礎的体験となり、関わる人との関係を広げる豊かな交流の機会にもなる。1歳児と保育者、1歳児同士の共感的相互作用を通して遊びへの意欲を高めることができることを理解した。

本研究では、1歳児のふれあい遊びの相互作用による遊びの展開を示すことができた。保育者は快の感情を共有し、幼児の様子に応じた遊びの展開や他児との関係調整に配慮した関わり方によって、幼児の遊びへの意欲を高めることができるだろう。共感的相互作用を活用した関わりは、保育者だけでなく親の関わり方の自信にもつながる。今後、1歳児のふれあい遊びにおける感情交流の多様な場面について検討するとともに、共感的相互作用の発達プロセスについて理解を深めたい。

文 献

- 1) 藤田浩子, ふれあいあそび ギュッ, 一声社, 東京(2001)
- 2) 塩野マリ, 2・3歳児のふれあい歌あそび, ひかりのくに, 大阪(2001)
- 3) 阿部ヤエ, 「わらべうた」で子育て入門編, 福音館書店, 東京(2002)
- 4) 厚生労働省, 保育所保育指針, (2009)
- 5) Moog, H., *Das Musikerleben des vorschulpflichtigen Kindes*, (1968), 石井信生訳, 就学前の子ども音楽体験, 大学教育出版, 岡山, pp.68-72 (2002)
- 6) Condon, W.S., & Sander, L.W., Neonate movement is synchronized with adult speech: interactional participation and language acquisition. *Science*, 183, pp.99-101 (1974)
- 7) Konvalinka, I., Xygalatas, D., Bulbulia, J., Schjodt, U., Jegindo, E.M., Wallot, S., Van Orden, G., & Roepstorff, A., Synchronized arousal between performers and related spectators in a fire-walking ritual. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 108, pp.8514-8519 (2011)
- 8) Cirelli, L.K., Einarson, K.M., & Trainor, L.J., Interpersonal synchrony increases prosocial behavior in infants. *Developmental Science*, 17 (6), pp.1003-1011 (2014)
- 9) 佐藤 徳, 心をつなぐ運動の同期 - 対人同期現象と自閉症スペクトラム障害 発達 148, 59-64 (2016)
- 10) 遠藤 晶, 手遊びにおける共感的相互作用～身体表現の活性化に関するサーモグラフィによる検討～, 日本発

(遠藤)

育発達学会第14回大会プログラム・抄録集, p.61 (2016)

- 11) 中澤 潤, 情動制御刺激の有効性の心理生理学的指標による検討, 千葉大学教育学部研究紀要, 57, pp.119-124 (2009)
- 12) Mizukami, K., Kobayashi, N., Ishii, T., & Iwata, H., First selective attachment begins in early infancy: A study using telethermography. *Infant Behavior & Development*, 13, pp.257-271 (1990)
- 13) 斎藤孝, 身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生, NHK ブックス, 東京(2000)

謝 辞

観察に協力いただきました, 幼保連携型認定こども園の幼児のみなさんと先生方には, ふれあい遊びの観察の機会を与えていただきました. 心より感謝を申し上げます.

付 記

本論文は, 科学研究費補助金(基盤研究(C) 26350946)『幼児の身体表現活動における共感的相互作用の解析とその応用』(代表 遠藤 晶)による研究成果の一部である.

受稿日 2016年9月19日 受理日 2016年12月1日